ホトトギス

六月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号
平成二十二年六月一日発行（第百十四巻第六号）

俳句随想〔三百四十八〕

汀　子

東日本大震災は大変な災害となり、死者、不明者合わせて三万にも達する被害を告げている。加えて原子力発電の事故である。放射能が洩れだし収拾のつかない大惨事となりそうな恐ろしい現実である。被害に遭われた方々には慰めの言葉も無く、我々が出来る限りのお見舞いと思っても何が出来るだろうか。

俳句は自然を詠み、人間を詠み、人間の生活を詠む短い詩である。何程の事も言えない俳句であっても、季題が事柄を代弁して大きな事を一句の背景として伝える事も出来る。

今回、地震、津波、原発の脅威などを詠もうとしても、よほど季題を考えて季題に思いを托さねばならない。ニュース性のある事柄を詠むのは、社会性俳句と言って花鳥諷詠俳句とは違うかも知れない。しかし、この度の災害は人間の生活の中に土足で踏み込んで来た自然の姿でもあるように思う。原発は人災であるが、それでも、地震や津波で放射能が洩れだしたのであるから、自然の脅威の下で起こった事に違いないのである。

十六年前の阪神淡路大震災の渦中にあった我々は仲間たちと共に沢山俳句を作った。俳句を作ることで心が冷静になれた。今回も災害を直視して、自然と向き合いたいと思う。すでに多くの人が大震災の俳句を作って被災された方々と悲しみを分け合っている。

PDF= 俳誌の salon

句日記

汀子

平成二十二年六月五日　芦屋ホトトギス会

万緑に息をつなぎてゆく旅路
鈴蘭の野へつながりし旅心
蚊のためにあるやうな庭なりしかな

六月六日　下萌句会

きざはしを天につなぎて雨蛙
活けられて十薬の花らしからず
雨蛙跳ぶ態勢のとととのひし
快晴の朝かしこまる雨蛙

六月七日　ロイヤル俳壇

学び舎は花アカシヤの坂の上
五月雨を憂しとせざりし家居かな
峡宿の山女の膳に揃ひけり
あらそへぬ年齢の枷五月雨るる
さつさうと零の出発ライラック

六月八日　大阪倶楽部

上京の朝自ら明易し
短夜の寝足りし朝でありしかな
カーテンに夢と現実明易し
入梅の日と旅の日と重なりぬ
寝返ればつづかぬ夢よ明易し
又一つ実梅ころころ芝の中

六月八日　綿業倶楽部

ががんぼの逃げたき音と知るまでは
怖るるはががんぼの方なりしかな
鈴蘭の香り束ねて渡さるる
見えてゐて見失ひたる蝸牛
蝸牛飼ひみまかりし友のこと
伝説はすべて悲しき杜若
銀の跡曳く所在蝸牛
五月闇深し明るき一と所

六月十一日　工業倶楽部

さう思ひまだかと思ふ梅雨入かな
山荘は廃居となりぬ蟇
棲む蟇に明け渡したる山の荘
足許にかしこまりたる蟇
一八とその名を知りて引返す

六月十二日　北近畿ホトトギス俳句大会前日句会

緑抜け緑カーブよ又カーブ
暑さうな顔が写されをりにけり
汗すぐに引く風山の高さかな
きんぽうげ黄色が飛んで運転す
花を見てやはり朴の木なりしかな

六月十三日　北近畿ホトトギス俳句大会

誰彼を偲ぶ波音梅雨に入る
入江なす天の橋立夏燕

六月十五日　有恒倶楽部

雨似合ふ水辺の似合ふ花菖蒲
蚊遣火を焚きてはじまる庭仕事
狭庭よりはじまつてをり青嵐
六甲を吹きおろしたる青嵐
露涼しはやぶさ帰還せし快挙
星を見るきざはし閉ざし梅雨籠

六月十五日　無名会

二日来し庭師目こぼし梅雨茸
木天蓼の山路に出れば迷はずに
はやぶさの快挙に消ゆる梅雨の憂さ
梅雨茸蹴つて通りし人の居て
木天蓼や三瓶の旅の近づきぬ
帰りにはあとかたもなし梅雨茸
木天蓼や旅路彩るものとして

六月十六日　夏潮句会

合歓の花天蓋なせる水の音
六甲をつなぐ木々あり青嵐
木洩日の揺れて尽きざる青嵐
夏至と聞きつゝ一日の過し方
東京の梅雨晴を持ち帰りたる
夏至とても時間は待つてくれざりし

六月十四日　きさらぎ会

潮風に紛るる香あり花蜜柑
夏霞裾曳く富士の山俯瞰
蛍の里と呼ばれし室生路へ
梅雨とても降らぬ憂さとてありぬべし
満天の星降りて来し蛍かな

六月二十五日　時雨会

サッカーを見て一と眠り明易き
忽ちに海へ届きぬ夏の川
杜若三瓶の旅も旬日に
御祓川水音高き所かな

六月二十六日　句会と講演の会

鰺料るとき骨の処置など決め手
若竹の紛るる早さありにけり
タワーの灯青く点りて涼しさよ
梅雨憂しとせぬ解答は大胆に

六月二十八日　春菜会

ふり返る過去を引寄せ露涼し
記憶とて定かならねど梅雨曇
おしやべりは女の時間明易し
夏痩の期待もうなし春菜会
又一つ年を重ねて梅雨に会ふ
久闊といふも一年露涼し

六月二十九日　春菜会

現れて梅雨の太陽なりしかな
若き日を汗の真顔の語りけり
青芝に語り尽せぬ日となりぬ
昨日より今日の梅雨晴信じられ
会場の鼾鼾にも汗の対処かな
梅雨霧の海を閉ざせる早さかな
うろうろと右往左往や梅雨の鼾鼾

六月二十一日　アサヒカルチャー

夏至と聞きつゝ一日の過し方
東京の梅雨晴を持ち帰りたる
夏至とても時間は待つてくれざりし

六月二十四日　きさらぎ会

潮風に紛るる香あり花蜜柑
夏霞裾曳く富士の山俯瞰
蛍の里と呼ばれし室生路へ
梅雨とても降らぬ憂さとてありぬべし
満天の星降りて来し蛍かな

六月二十五日　時雨会

サッカーを見て一と眠り明易き
忽ちに海へ届きぬ夏の川
杜若三瓶の旅も旬日に
御祓川水音高き所かな

六月二十六日　句会と講演の会

鰺料るとき骨の処置など決め手
若竹の紛るる早さありにけり
タワーの灯青く点りて涼しさよ
梅雨憂しとせぬ解答は大胆に

六月二十八日　春菜会

ふり返る過去を引寄せ露涼し
記憶とて定かならねど梅雨曇
おしやべりは女の時間明易し
夏痩の期待もうなし春菜会
又一つ年を重ねて梅雨に会ふ
久闊といふも一年露涼し

六月二十九日　春菜会

現れて梅雨の太陽なりしかな
若き日を汗の真顔の語りけり
青芝に語り尽せぬ日となりぬ
昨日より今日の梅雨晴信じられ
会場の鼾鼾にも汗の対処かな
梅雨霧の海を閉ざせる早さかな
うろうろと右往左往や梅雨の鼾鼾

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年六月一日　カトリック新聞選者吟

衣更へて祈りの人となりゆけり

六月三日　蕉心会

打水をして下町の出来上る
白靴の彦様じつと川を見る
をばちやんの日傘階段塞ぎけり
蜘蛛の囲の下町風といふ角度
猫知らんぷり片陰を離れざる
万緑を競ひ合ひたる館の庭
橋涼しスカイツリーの見えてより
花栗の香りてよりの会話かな

六月三日　元ルートの会

葉隠れといふ夏蝶の吐息かな
川の水涼しく揺れてをりにけり
丸ビルを出で涼しさといふ出会
青嵐めくビル街の騒きかな

六月五日　内原弘美様御見舞

夕虹を君と仰げる日も近し

六月六日　野分会芦屋例会

燕の子明日は飛翔といふ構へ
五月闇抜け真つ新な朝かな

六月七日　はせを句会

賀の人を涼しく迎へたる句会
やませ吹く中披かるる句碑の文字
山梔子の花とんがつてゆく朝
青薔薇の香に祝ぎ心昂れり

六月十日　土筆会

喪の旅の三日目となる黴の宿
雹降つて都心止まつてをりにけり
軽鳧の子に親の視線といふ呪縛

六月十一日　六甲会

芦屋市に生れて烏の子の運命
一輪の未央柳に偲ぶ人
烏の子三百年の松の上
悌は未央柳に佇てばなほ
その中の君はヨハネか烏の子
未央柳佳人談義もたけなはに
虚子館の未央柳は風が好き
未央柳若き主宰の輝きに

六月十一日　虚子記念文学館投句

合歓咲いて星のきざはしてふ角度

六月十二、十三日　北近畿ホトトギス俳句大会

夏館美女と野獣の足湯かな
その中のシテめく時鳥孤高
時鳥鳴くからちよつとお静かに
土器の万緑に吸ひ込まれゆく
美しき佳人の涙灯涼し

六月十四日　朝日カルチャー若草句会

五月雨や旅の余韻を持ち寄りて
南吹く六甲の木々騒がせて
鳶の笛南風に溶けてゆきにけり
五月雨に二級河川の膨めり

六月十五日　草木瓜会

梅雨寒を来て一献に潤へり
紫陽花の空恋ふ色でありにけり
梅雨寒や東京都心灰色に

六月十七日　登高会

芦屋川目高の見えてくる仔細
役一つ終へて形代流しけり
一水を揺らして目高増えゆける
手を繋ぐやうに形代流れゆく

六月二十二日　若水句会

勝馬に湯気といふ伽ありにけり
ダービーの空に夢散る馬券かな
父の日や子供は居るだけで宝
父逝きて三十年や父の日に

六月二十三日　目黒学園句会

ベゴニアの葉に彩りのありにけり
この里も水鶏絶滅したといふ
夏帽を振りて帰らぬ旅となる
夏帽子遺されてゐる書斎かな
ベゴニアを咲かせブラジル領事館
過疎の村水鶏の声に暮れゆけり

六月二十六日　ホトトギス社句会

ロンの居ぬ庭淋しめず今年竹
この鰺は釣つて来たことにしといて

六月二十七日　野分会東京例会

五月闇新人賞が払ひゆく
五月闇らふそく能に解けゆく

六月三十日　「俳句研究」秋の作品集

終戦の日より仕舞はれたるラジオ
マエストロ秋思のアインザッツかな
神の手に引かれる如く鷹渡る
檸檬育て平家の裔を誇りとす
初鴨や近つ淡海を斜交ひに

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

寒菊を活け震災の忌を修す　芦屋　小田ひろ
震災の忌日を修し春を待つ　同　同
歳月の過ぎゆく早さ寒の月　同　安原　葉
住み慣れし京あがりてふ絵双六　京都
悲しみも甦りくる春近し　同　同
凍蝶の日に舞ふ願潰えしか
戎笹大阪弁の渦に買ふ　高槻　会田仁子
スケーター恋の時間を廻りけり　同　同
手袋をはづしてよりの本気かな
数へ日を天命捲る如くにも　福山　竹下陶子
初日いま高天原を躍り出づ　同　同
左義長や里には平家物語　神戸　山田佳乃
編棒を踊らせてゐる冬日向　同　同
短日やあちらこちらに知らぬ傷
網代垣まつすぐ女礼者来る　龍ケ崎　今橋眞理子
母すでに起きて淑気の厨かな　同　同
買初や三越前でどつと降り
買初や遊び心のもの少し　同　同

寒造杜氏は温度と闘へる　奈良　古賀しぐれ
冴返り冴返り酒醸さるる　同　同
酒蔵の大梁哭かせ冴返る　東京　大久保白村
常夏の島より女礼者かな　同　同
マウイより来て初旅の友となる　相模原　木村享史
人は首枯木は幹に名札下げ　同　同
老虚子に浅間颪の隙間風　香川　湯川　雅
隙間風遺影はいつもそこにあり　同　同
クリスマスカード地球の裏に友　八尾　山下美典
歩を留めゐて底冷のくつつきぬ　同　同
寒林の影乱す影ありにけり　東京　橋本くに彦
梅一輪ごとに日向を切りとりぬ　同　同
耐へてゐる色には見えず寒牡丹
七種といふも雑草めきしもの　柏　田丸千種
立春の上昇気流鳶舞へり　同　同
うす雲を呼ぶこと好きな春の空　櫃原　稲岡　長
名園に点景残し春の雪　同　同
海へ出る船を押し出し雪解川
うすらひとうすらひの影ちよつとずれ
薄氷の透明水の透明へ
鷹去りし中天の藍深きかな
一村が雪解雫の中にあり
屋根の雪生活を籠めて音も無し
春の旅人語を欲りて奥丹後

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（五月号より）

憲　明・芳　子・中　正
眞理子・保　佳・静　龍
美　奇・むつみ・千鶴子
とほ歩・葉　　・廣太郎

初夢はかなしきことをなつかしく　橿原　**稲岡　長**

元旦の夜から二日にかけてみる夢が初夢。宝船の絵を枕の下に敷いてよい夢をと願うこともする。この句は、そういう夢ではない。夢の中に、意識の奥の想い出がふっとあらわれてきて驚かされる。「かなしい」は、感情の身にしみて切ないこと。つらくて心のいたむ悲哀にも、いとしい愛憐にも使う。この句の「かなしき」には、両方のかなしみの入り混ったひびきがある。かなえられない願望を果したいと一途になったこともあったが、今は全てが、懐かしい想い出となってよみがえってくる。それでよかったと、ふり返る。人生の深い哀歓を、さりげなくまとめあげられた。（憲明）

一般的には「初夢」は楽しいもので、正月をうきうきと過ごせるひとつのイベントのようなものだろう。でも、勿論この句のように楽しい内容の夢ばかりではないだろう。深読みのし過ぎかも知れないが、どうしても作者の御嬢様が夢に出てこられたのではないかと、しみじみと思ってしまう。（廣太郎）

虹に逢ひ虹に別れし出合ひかな　東京　**川口利夫**

虹といえば虚子の虹の句が浮ぶ。傍くも美しい自然現象の出逢いである。作者はドライブされていた時であろうか、偶々行く手に美しい虹を見られたその時の感動！なかなか見れない虹に逢い得たよろこびと、虹の消えてゆく侘しさ、しばしの出合ひに、作者はきっと亡き愛妻咲子様を心にえがかれたであろう。よく山会のお文章にも書かれているが、若く美しい奥様の事をなつかしく切なく思い出されたと思う。虹は幻想的である。心に残る一句と思う。（芳子）

旅の一シーンであろうか。御本人か、あるいは旅で来られた方との出会いの時丁度「虹」が立ち、何日か楽しく過ごした後いよいよ別れる時も虹が立ったのである。何ともドラマチックな出会いと別れであり、季題が効果的に作用している。物語の主人公を見ているようである。（廣太郎）（以下略）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

冴子選

静夫忌へ駆る荒るるとも凍つるとも　金沢　藤浦昭代
歳月は古り炉の思ひ出は古りず　同
心また旅を恋ひぬるクリスマス　熊本　岩岡中正
年行きていくさ果てたるごとくなり　同
太陽の黒点目差す冬木の芽　東京　稲畑廣太郎
焚火跡人類ここに誕生す　同
雪国の春一番といふ便り　京都　安原葉
薄氷に雲一片もなき朝　同
庄屋とし真先に絵を踏みにけり　神戸　三村純也
ちぢれ毛を疑はれたる絵踏かな　同
宝船敷きて三施の外にをり　同　後藤比奈夫
老とても確と充電三ケ日　同
そむけたる面輪に写る焚火かな　たつの　浅井青陽子
退院の電話のありて日脚伸ぶ　同
凩に磨かれ残る星一つ　相模原　木村享史
文化財なれば詮なし隙間風　同
紅梅のことにけぶりて遥かなる　東京　今井千鶴子
肩寄せて小さき地蔵春を待つ　同

雪解水混る野川も温み初む　櫃原　稲岡長
春泥に踏み込みてさへ思ふこと　同
たもとほるものみな春の匂ひして　神戸　長山あや
梅暮れてうすくれなゐの香の残る　同
探梅に城の青空ついて来る　奈良　古賀しぐれ
城の黙梅の黙解き日本晴　同
外燈を通るとき雪大となる　熱海　嶋田摩耶子
見下ろしの景のスケート人の渦　同
今年また海にとび出て初日の出　同　嶋田一歩
箱根路を登る駅伝見に二日　同
百寿訪ふ礼者卒寿でありにけり　吹田　宮﨑正
氷柱せし庭解けたる水の音　同
悴める手に絶筆を受け取りぬ　箕面　井上浩一郎
笹鳴を聞きしと思ふ森の風　同
磯宮の開かれゐしは年用意　徳島　上﨑暮潮
数へ日を里人寄りて宮掃除　同
まつしぐら出世街道絵双六　東京　河野美奇
泣き虫も勝気も一緒絵双六　同

PDF= 俳誌の salon

天地有情句評

汀子

薄氷に雲一片もなき朝　京都　安原葉

放射冷却の朝。

ちぢれ毛を疑はれたる絵踏かな　神戸　三村純也

キリスト教迫害の歴史。

老とても確と充電三ケ日　神戸　後藤比奈夫

大切に過ごす三ケ日。

退院の電話のありて日脚伸ぶ　たつの　浅井青陽子

安堵。

文化財なれば詮なし隙間風　相模原　木村享史

時代と共に。

静夫忌へ駆る荒るるとも凍つるとも　金沢　藤浦昭代

辻口静夫さんを悼む心切。

年行きていくさ果てたるごとくなり　熊本　岩岡中正

平和への願望。

焚火跡人類ここに誕生す　東京　稲畑廣太郎

自然の中に生きて来た人間の歴史。

PDF= 俳誌の salon